

# 一番気乗のする時

芥川龍之介

青空文庫



僕は一体冬はすきだから十一月十二月皆好きだ。好きといふのは、東京にゐると十二月頃の自然もいいし、また町の容子ようすもいい。自然の方のいいといふのは、かういふ風に僕は郊外に住んでゐるから余計よけいそんな感じがするのだが、十一月の末すえから十二月の初めにかけて、夜晩おそく外からなんと帰つて来ると、かう何なんともしれぬ物の臭におひが立ち籠こめてゐる。それは落葉おちばのほひだか、霧のほひだか、花の枯れるにほひだか、果実の腐くれるにほひだか、何んだかわからないが、まあいいにほひがするのだ。そして寝て起きると木の間こまが透すいてゐる。葉が落ち散つたあとの木の間が朗ほがらかに明あかるくなつてゐる。それに此処ここらは百舌鳥もずがくる。鶉ひよどりがくる。たまに鶺鴒せきれいがくることもある。田端たばたの音無川おとなしがはのあたりには冬になると何時いつも鶺鴒せきれいが来てゐる。それがこの庭までやつてくるのだ。夏のやうに白鷺しろさぎが空をかすめて飛ばないのは物足りものたないけれども、それだけのつくなひは十分あるやうな気がする。町はだんだん暮近くなつてくると何処どこか物々しくなつてくる。ざわめいてくる。あすこが一寸愉快だ。ざわめいて来て愉快になるといふことは、酸漿提灯ほぼづきちやうちんがついてゐたり楽隊がゐたりするのも賑にぎやかでもいいけれども、僕には、それが賑かなだけにさういふ時は暗い寂しい町が余計眼よけいにつくのがいい。たとへば須田町すだちやうの通りが非常に賑かだけれど、一ち

よつと かぢちやう 梶町 あをものいちほ 青物市場の方へ曲るとあすこは暗くて静かだ。さういふ処を何かの拍子 ひやうし で歩いてゐると、「鍋焼 なべやき だとか「火事」だとかいふ俳句の季題を思ひ出す。ことに極 ごく おしつまつて、もう門松 かじまつ がたつてゐるさういふ町を歩いてゐると、ちよつと久保田 くぼたまんた 万太郎 らう 郎君の小説のなかを歩いてゐるやうな気持でいい気持だ。

十二月は僕は何時 いつ でも東京にゐて、その外 ほか の場処 ばか といつたら京都 きやうと とか奈良 なら とかいふ甚 はなは だ平凡な処 はなは しかしらないんだけど、京都へ初めて往 い つた時は十二月で、その時分は、七 し 条 ちでう の停車場も今より小さかつたし、烏丸 からすまる の通 とほり だの四条 しでう の通 とほり だのがずつと今より狭 せま かつた。でさういふ古ぼけた京都を知つてゐるだけだが、その古ぼけた京都に滞在してゐる あひだ 間に二 ふた 三 さん 度 ど 時雨 しぐれ にあつたことをおぼえてゐる。殊 こと に下 しも 賀 かも 茂 ただす の糺 ただす の森であつた時雨 しぐれ は、丁 ちやう 度 ど 朝 あさ 焼 やき がしてゐるとすぐに時雨 しぐれ 来て来たんで、甚 こと だ風流 ふうりゆう な気がしたのを覚えてゐる。時 とき 雨 あめ といへば矢張 やは り其時 そのとき、奈良 なら の春日 かすが の社 やしろ で時雨 しぐれ にあひ、その時雨 しぐれ の霽 は れるのをまつ間 あひだ お神 かみ 楽 がく をあげたことがあつた。それは古風 こふう な大 やまと 和 わ 琴 こと だの箏 さう だのといふ楽器 がくぎ を鳴 な らして、緋 ひ の袴 はかま をはいた小さな——非常に小さな——巫女 みこ が舞 ま ふのが、矢張 やは り優美 ゆうび だつたといふ記憶 きおく がのこつてゐる。勿論 もちろん 其時分 そのとき は春日 かすが の社 やしろ も今のやうに修 しう 覆 ふく が出来 でき なかつたし、全体 ぜんたい がもつ

と古ぼけてきたなかつたから、それだけよかつたといふ訣だ。さういふ京都とか奈良とかいふ処は度々ゆくが、冬といふとどうもその最初の時の記憶が一番鮮かなやうな気がする。それから最近には鎌倉に住つて横須賀の学校へ通ふやうになつたから、東京以外の十二月にも親しむことが出来たといふわけだ。その時分の鎌倉は避暑客のやうな種類の人間が少いだけでも非常にいい。ことに今時分の鎌倉にみると、人間は日本人より西洋人の方が冬は高等であるやうな気がする。どうも日本人の貧弱な顔ぢや毛皮の外套の襟へ頤を埋めても埋め榮えはしないやうな気がする。東清鉄道あたりの従業員は、日本人と露西亞人とで冬になるとことにエネルギーの差が目立つといふことをきいてゐるが、今頃の鎌倉を濶歩してゐる西洋人を見るとさうだらうと思ふ。

もつとも小説を書くうへに於ては、寧ろ夏よりは十一月十二月もつと寒くなつても冬の方がいいやうだ。また書く上ばかりでなく、書くまでの段取を火鉢にあたりながら漫然と考へてゐるには今頃が一番いいやうだ。新年号の諸雑誌の原稿は大抵十一月一杯までは十二月のはじめへかかる。さういふものを書いてゐる時は、他の人は寒いだらうとか何とかいつて気にしてくれるけれども、書き出して脂が乗れば煙草を喫むほかは殆ど火鉢

なんぞを忘れてしまふ。それにその時分は襖ふすまだの障しやうじ子だのがたて切つてあるものだから、自分の思想や情緒とかいふものが、部屋の中から遁出にげだしてゆかないやうな安心した処があつてよく書ける。もつともよく書けるといつても、それは必ずしも作の出来栄えには比例しないのだから、勿論新年号の小説は何時いつも傑作が出来るといふ訣わけにはゆかない。

(大正六年)

# 青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 一番気乗のする時

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>